研究雑話（3）

「止まれる子どもは発達する」（E・セガン）

手は突き出た大脳・セガン教育の原理（一）

藤井力夫

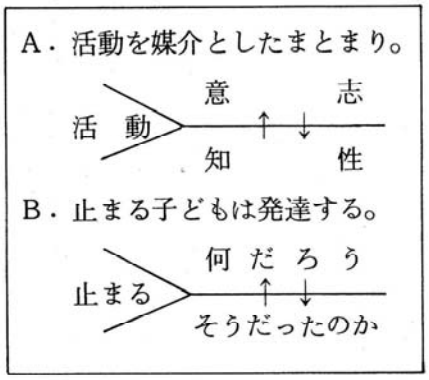
前回は、障害児教育創始時の脳研究の到達段階（脊髄反射弓の発見と上位中枢の役割）とE・セガンの立場についてお話しました。「たんなる彫刻家であってはならない。真の意味で芸術家でなければならない」。彫刻家の人が聞けば怒りそうな言葉ですが、彫刻も外面ではなく内面の骨格の構造から表現すると言われますから同じ意味だと思います。外からだけ脳を見ていないで、手が突き出た大脳としてまわりの世界を知覚し行為する様子そのものを研究しよう。発達遅滞の人たちの手がそのように使われるように日常生活の中で探してみよう。教育として場面を設定してみよう。これがセガンの考えであった。以下、数回にわたってそうした手になるためには何が大事か、セガンの提起するところをお話したいと思います。

一回目は、「止まれる子どもは発達する」、「止まった時には手を使う」についてです。なんと鋭い言葉でしょう。障害者の自立をめぐって「ヘルプコールできる人は自立できる」と言われますが、これは「止まり方」がさらに上手になった証拠で、自分の手には負えない、ここを助けてほしいと瞬時に判断できていることになるわけです。多くの体験があってはじめて言えるわけで、最初はだれも止まって戸惑い、場合によっては逃げ出してしまうのが実態です。しかし、止まった子どもは発達する、止まれる子どもは発達する、これがセガン教育学の真髄で、障害児教育の事始めでもありました。時は、一八四一年十月、パリの病院のある一室。つぎのような状況であった。

「がやがやして静かにしておれない。蛮声を発している人、私におじぎをしてやめない人、寝そべっている人、逃げていく人、さまざまである。私はこの人たちの直中にいる。この人たちをどうするか。列ばそうとしてもどうにもならない。なんとか止まってくれないだろうか。自分の意志で止まる力。何だろうと思った時に、ちゃんと止まる。この力をどうつけるか。これが私の課題だ」（セガン、一八四二）。

「動のなかにある止（イモビリテ）」。「自分で止まること。これこそ最初の自我（ノオション・ペルソネール）」。障害児教育は当初からこれ自体、即ち、その人なりの止まる力の形成を目的にしていた。なんとすぐれた卓見であろう。いまさらながら驚かされる。ただ止まっているだけではない。

三位一体（知性・活動・意志）



（E．セガン：1843）

止まっている時に次の行動の準備をしている。持ち換えたり、見比べたり、発達段階によって違うが、その人なりにどうしようか心の準備をしている。止まった時に体験したこと、過去のよく知っている事柄と比較し、違っていればそれなりにどこがどう違うのか検討を開始する。最初はまったく快、不快が基準であった。やさしい人かそうでないか。そしてやがて好き、嫌いが基準となっていく。動物では空腹を満たすことと、危険かどうかが基準で、これ以上にはあまり変化しないとされる。

人間としての判断。その人なりの生きる力、基準、知恵といったものが、この止まった時のその人なりの基準の持ち方にあるといって過言ではない。図に示したように活動を媒介として知覚（認識）と意志（行為）。このまとまりの三位一体に人間としての「生」があるとする。動いている時でなく、動いているなかでどのように止まるか。これがその人の生きる力、ということになる。したがって、これはその人の気付き方だし、その人の情動、関心ぬきには存在しない。いずれにしても、「たくましさ」が求められる所以である。その人なりの止まり方を大事にする、この考え方は障害児教育でもっと強調されていいように思う。三和荘で働く人たちがその人なりの立ち止まり方をして、その人なりに考え、同時に行動する。助けも求める。一人ひとりの日常でこれが展開され、毎日が成り立っている。これを保障することが障害児教育の中身であり、目的であった（北海道教育大学助教授）。